

# 琉球大学学術リポジトリ

## 後期近代と非包摂型の福祉—コモンウェルスと観光をめぐって

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科 公開日: 2014-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 拓也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/28254">http://hdl.handle.net/20.500.12000/28254</a>

## 後期近代と非包摂型の福祉——コモンウェルスと観光をめぐって

Consideration for an Alternative Social-Welfare in the Late Modernity  
: Commonwealth and Tourism

渡 邊 拓 也\*  
Takuya WATANABE

### 第二の後期近代——1990年代の転換

本稿の出発点となるのは後期近代と「過剰包摂」(過食症社会)を巡るジョック・ヤングの議論である。新犯罪学の旗手をつとめるこのイギリスの社会学者は、(20世紀半ばの欧米で黄金期を迎えた近代資本主義社会が、1960-1970年代の個人主義と価値観の多様化によって解体されたという)ホブズボーム(1994)の時代分析を踏まえつつ、後期近代という時代の到来について、すなわち確信と同調に支えられた包摂型社会から、リスクと不確実性に貫かれた排除型社会への移行について指摘した。端的に言えばそこで起こったのは、社会的排除と文化的包摂との同時進行である(Young 1999=2007: 208, 220)。社会経済的アンダークラスはもはや社会の中心的領域(正規雇用市場など)には決して引き入れられず、周辺の領域(低賃金労働者など)に留められるにもかかわらず、相変わらず昔日の完全雇用社会の復活と社会上昇が可能になる日々の再来を待っている。彼らはまた自分がミドルクラスに属する者であるかのように、貧しい財布をはたいて喫茶店の珈琲を飲み、着飾り、音楽を嗜み、古いプチブルの記号消費文化に身を委ねている。こうした奇妙な不一致はブルデューの『ディスタンクシオン』(1979)にすでに描かれていたが、それを「過剰包摂」の理論へと練り上げたのはヤングの大きな功績だったろう。

ヤングは犯罪研究というその性質上、主に経済資本におけるアンダークラス(貧困層)に議論を集中させていたが、私が特に社会病理と福祉について考える中で試みようとしたのは、このヤングの議論を他の資本、とりわけ社会関係資本へと応用できないかということだった。つまり、後期近代には経済資本のみならず、社会関係資本におけるアンダークラスのようなものが(過剰包摂によって)新たに生み出されたのではないかということである。具体的にはそれは、地域社会における関係(相互扶助)への期待の高まりや、コミュニケーション能力の重視といった事態を、そしてまたその反転として、孤立、ひきこもり、コミュニケーション障害といったものが新たな病理として「発見」およびイシュー化されていったことを指している。換言すれば、明るく社交的に振る舞い、多くの友人を持つ個人という「理想像」が過度に強調されることで、そうでない者は逸脱的とみなされるようになるということだ。それは地域交流の欠如なり、当人の行動力の不足なり、何らかの「欠乏」の問題とみなされる。

グローバル化や産業構造の変化などによって、いわゆる「後期近代 late modernity」が1970年代頃に開始されたという点については、多くの論者が意見を一致させている。だが、少なくとも日本のケースに照らしてみれば、上述の変化はおそらく1990年代頃に起こっていたと言えるだろう。例えば地域社会への注目は、社会民主主義的な福祉国家モデルが事実上崩壊した後ほどなくして立ち上がったものの、バブル期の(上からの)地域活性化政策の失敗期を経て、1990年代に再び(家族愛の言説とともに)出現し盛り上がることになる。この時、地域コミュニティのつながりが「失われた」という言説が起こり、その復旧が叫ばれる。また他方では(windows95の登場をメルクマールとして)ITとインターネットが発達し、

\* 京都大学文学部グローバルCOE(研究会開催当時)

やがてfacebook、twitter、LINEといったSNSの通信網が急速に全世界を覆うようになる。この1990年代以降の「つながりの社会の到来」ないしは「社会関係資本の戴冠」を、ここでは仮に「第二の後期近代 second late modernity」と呼んでおくことにしたい。

## 福祉そのものの危機

ときに後期近代においては、福祉国家のみならず、福祉そのものが危機に瀕することになる。というのは、近代に整備される福祉の本質は社会的包摂にあったからだ。19世紀のヨーロッパで貧困が問題となるのは人口減と労働力不足との関連においてであり、20世紀半ばにケインズが富の再配分を訴えるのは、「物欲はあるが資金を持っていない人々」に富を渡すことで消費市場を再活性化させるという、ある種ストイックなまでに合理的な経済政策のためだった。つまり近代の福祉政策とは、憐憫の情から行われる慈善事業というよりは、ドロップアウトしつつある貧困層を「社会の一員」として招き入れ、労働と消費の市場へと再び包摂するためのものだった。

だが先に触れたように、後期近代の社会的弱者の包摂先はもう社会の中心的領域ではなく、非正規雇用やワーキングプアの領域となっている。後期近代の福祉（自立支援）は、排除された存在に手を差し伸べはするものの、彼らを厳しい競争社会のヒエラルキーの底辺部へと組み込んでがんばれと背中を押し出すような、どこか残酷な役目しか果たせないものに変容しているのである。言い換えるなら、従来の包摂型の福祉は、かつては確かに人助けの慈善的な性質を備えていたけれども、今日のそれは、福祉自身が過剰包摂を生み、さらに搾取を生むという悲劇のプログラムに転落してしまっている。

つまり現代においては、福祉を無批判に何かしら「良いこと」と考えることはできない。財政破綻と雇用形態の変化によって、国家や企業の主導する福祉（社会保障および国民年金と厚生年金）が機能不全に陥りつつある現在、自分たちの面倒は自分たちでみることに、すなわち家族や地域社会へと負担を譲渡する傾向は強まっている。その一方で新左派（ニューレフト）の想定する「福祉社会」は、依然として社会的包摂を基盤に置くものであり、新自由主義との結託を経て（「良いこと」としての）ノーマライゼーションと自立支援の動きが開始されている。こうした状況を考慮に入れた上で、新しい時代の非包摂型の福祉が思考されなくてはならないのである。

## 突破口としての「コモン・ウェルス」と観光産業の可能性

「富者が貧者を養いつづける」包摂型福祉モデルに代わるオルタナティブとして考えられるのは、必要な時にだけ作動するタイプの、「セーフティネット」型の福祉である。この意味で私は新しい福祉の担い手となる母体の役目を地域社会に期待しているのだが、ここで言うセーフティネットとは、ネグリとハート（2009=2012）の言うところの資本に篡奪されない〈共〉の形成、および地域社会におけるあらゆるタイプの「ベーシック・インフラ」の整備を意味している。それは第一に、川端浩平が近著（2013）で述べるような、衣食住や眠りを保障するもの（雨風をしのげる宿泊場所、共同の炊事場など）である。加えて第二に、文化・情報資本に関するもの（情報提供=かつての防災放送塔や有線放送の後継となるもの）、そして第三に、社会関係資本に関するもの（つながりの提供=町内会、ご用聞き、ホームドクターなど）が考えられる。

中でもここで着目したいのは、第二の後期近代に力を持った「社会関係資本」である。3・11後に示された通り、それは強力なセーフティネットとして作動しうる。そして地域における人々のつながりや絆は、決して消失した訳ではない。つい資本という観点から眺めてしまうがゆえに、無いように見えるだけなのである。社会関係資本以前の社会関係は、地域社会にもともと資源として備蓄されている。この時、別角度から光を当てつつそれを発掘するだけのポテンシャルを秘めているもののひとつは、観光産業である。もちろん厳密に区別できる性質のものではないが、観光産業における「商品」は、(1) 物質的コンテンツ

に類するもの（風景やモニュメント、特産の土産物など）から、(2) 情報コンテンツ（ガイドブックの情報、歴史的知識など）を経て、(3) 情動的なはたらきかけによって「良い印象やイメージ」をもたらすもの（ホスピタリティ・ビジネス）へと重心を移動させてきたと言える。例えば観光ガイドは、情報化社会においては（知識を伝達する）専門家や「情報通」に近い立場に位置していたが、第二の後期近代においては、愛想を振りまく感情労働に従事することをますます要求されている。この感情労働が、観光客のまなざしを意識した地域住民の全体へと拡大していくとすれば、それは資本による悲しむべき篡奪が行われている証左とみなすことができよう。だが、我々にとって重要なのは、もはやマルクス主義のように市場経済と資本主義を全否定することではない。むしろ〈共〉なるものの形成のために、市場の力を上手く利用して「引きつけて投げる」ような戦略的振る舞いが求められているのである。ホスピタリティ・ビジネスや社会関係資本は、同様にどこかマクドナルドの店員のような人工的な作り笑いを想起させるものでもあり、過剰包摂と（コミュニケーション弱者への）新たな社会的排除を惹起する危険性と隣り合わせではあるけれども、だからといって全て否定してしまうのも極端な態度ではないだろうか。

したがって、例えばホスピタリティ・ビジネスと観光産業に便乗する形で、地域のベーシック・インフラを整備していくようなことができれば、それは観光産業と地域活性化のみならず、地域福祉への最大級の貢献となるはずなのだ。私がいま念頭に置いている例は、〈湯治場〉のようなモデルである。地元の人であれ観光客であれ、誰でも利用できる温泉宿があったとする。そこで観光客は「よそ者」から「(短期の) 滞在者」へと変容して、地域住民と観光客のあいだの非対称性は崩れる。つまり、観光客のまなざしが捨て去られ、まなざすまなざされるという非対称の関係が崩壊する。そしてこの非対称性の崩壊にこそ、ホスピタリティ（歓待）の神髄があるのであり、またそこには新しい非包摂型の福祉の萌芽が眠っているのである。

## 結語——未来の福祉のために〈共〉を再創生する

沖縄にかつて「サザン・ホスピタリティ」という言葉があったように、東南アジアには最近「アジア・ホスピタリティ」という言葉（広告コピー）が創られた。ホスピタリティと「笑顔でのおもてなし」は、このように部分的にはパッケージ化された商品にされるのだが、それでも人々のあいだのつながりを再確認させる作用を保持しているのは事実である。私がこのホスピタリティを体験したのは、かつて訪れた《アジア最貧国》カンボジアだった。私の知人はサイクリングで遠出して（自転車の故障で）帰れなくなった時、通りかかった村人が町までバイクで送り届けてくれたという。彼らは経済資本に関してはほとんど何も持ち合わせてはいない。しかし他の何かを豊かに持っているように見える。彼らの持つ安心感や余裕の源泉について考えてみると、三つの要因に思い当たった。ひとつは、豊穡な自然と農地（コモンズ）である。ココナツやマンゴーの木々は放っておいても実をつけて、走り回るニワトリは毎日卵を産む。つまり彼らは食料不足の心配をしていない。ふたつめは、寺院（宗教）の存在である。どうしても生活に困った時、彼らは寺に入って住み込みで働き、養ってもらえることができる。そして最後に、彼らには依然として強い親族や近隣のつながりが残っている。これらの「セーフティネット」の存在が、おそらく彼らの心の余裕とホスピタリティの背景にあるのだろう。

もちろん現代の日本でこうしたユートピアへの回帰を夢見ることはできない。ただし参考にすることは許されるはずではないだろうか。戦後の日本社会は、社会からの逸脱とドロップアウトに極めて厳しい社会だった。「正しい」人生のルールが敷かれ、そこから外れようとする者には容赦なき非難の目が向けられた。この包摂と矯正の傾向が、過剰包摂という形をとって今日でも継承されているのは先述した通りである。しかしながら、本来用意されるべきだったのは、ドロップアウトしてしまった者を受容し、社会的な死を食い止める最後のセーフティネットだったはずなのだ。現在この任に当たっているのは各種NPOだが、最終的には公的資金の援助を仰ぐケースがほとんどであり、自立したモデル確立には至っていない。



だからこそ、マーケットの力を利用して水路付けを行うことを考えるべき時期にさしかかっているように感じられる。もちろん観光産業とホスピタリティ・ビジネスに次の時代を切り開くポテンシャルを見るような態度は、いささか楽観的なものかもしれない。それでも、異質な他者どうしの間での協働や共生を含み込んだ〈共〉なるものの再創生が、今後の福祉を考える上で重要なキーワードとなるのは間違いないだろう。

## 参考文献

- 浅野俊哉、2006、『スピノザ——共同性のポリティクス』洛北出版。
- Delanty, G., 2003, *Community*. Routledge, London and New York (=2006、山之内靖・伊藤茂訳、『コミュニティ——グローバル化と社会理論の変容』NTT出版)。
- Hardt, M., and Negri, A., 2009. *Commonwealth*. Harvard University Press, New York (=2012、水嶋一憲監訳、幾島幸子・古賀祥子訳、『コモンウェルス——〈帝国〉を超える革命論』NHK出版。
- 川端浩平、2013、『ジモトを歩く——身近な世界のエスノグラフィ』御茶の水書房。
- 美馬達哉、2012、『リスク化される身体——現代医学と統治のテクノロジー』青土社。
- 渋谷望、2003、『魂の労働——ネオリベラリズムの権力論』青土社。
- 渋谷望『ミドルクラスを問いなおす：格差社会の盲点』、NHK出版、2010。
- Young, J., 1999. *The Exclusive Society: Social Exclusion, Crime and Difference in Late Modernity*. SAGE Publications, London (=2007、青木秀男・伊藤泰郎・岸政彦・村澤真保呂訳、『排除型社会——後期近代における犯罪・雇用・差異』洛北出版)。